

平成22年6月25日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520370
 研究課題名（和文） 言語コミュニケーションを支える規範と逸脱のダイナミクスの認知語用論分析
 研究課題名（英文） Cognitive Pragmatics: Analysis of the Dynamics of Norm and Deviation in Verbal Communication
 研究代表者
 岡本 雅史（OKAMOTO MASASHI）
 東京工科大学・片柳研究所・客員准教授
 研究者番号：30424310

研究成果の概要（和文）：従来単なる逸脱的な言語現象と見られてきた様々なレトリック表現を統一的に説明・記述可能な発話理解モデルを提案し、言語理解一般を話し手の事態認知と聞き手の発話事態認知の相互作用によることを明らかにした。特に、言語理解の対象を従来のように静的な「文」と考えるのではなく、動的な「発話事態」と捉え、その理解過程を説明することが可能な〈発話事態モデル〉を構築し、新しい言語学の研究パラダイムとして『認知語用論』を提唱した。

研究成果の概要（英文）：This study aims at setting up ‘Cognitive Pragmatics’ as a new paradigm of linguistics, which enables various rhetorical expressions, such as irony, metaphor, metonymy, synecdoche, hedges, to be consistently comprehended in view of the dynamics of norm and deviation in verbal communication. In particular, it is strongly suggested that what a hearer should understand is not a given utterance but a dynamic speech event in which both a speaker and a hearer are currently involved.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：語用論，認知言語学，コミュニケーション，レトリック，主観性／主体性，発話理解モデル

1. 研究開始当初の背景

従来の認知言語学では、統語論や意味論的な研究が中心であり、認知的な観点からの語用論的現象の分析は未だ数少ない。研究代表者がこれまでに行った、アイロニー発話の認

知言語学的分析はその数少ない例の一つであり、コミュニケーションという動的な場における言語運用とその理解過程を話者と聴者の認知という観点から研究する「認知語用論 (Cognitive Pragmatics)」は、文法現象や意

味現象を認知的観点から分析することで大きな成果を上げた認知言語学において次なる扉を開くものであると言える。

一方、認知言語学の進展とは全く別の方向で、近年「認知語用論」を標榜しつつある関連性理論 (Sperber & Wilson 1986) は、推論過程における命題としての表意・推意の復元を前提とするなど、生成文法以来の古典的計算主義の伝統を引き継いでいるが、研究代表者はこれを批判し、アイロニーやジョークなどの分析を通じて、解釈主体による命題復元過程を必要としない〈解釈随意性〉という概念を提唱してきた (岡本 1999)。さらに、コーパスを利用した言語学も近年盛んになりつつあるが、表層的な語彙分布に基づく subcategorization の統計的分析などが主流であり、談話の流れを支配する話者／聴者の〈主観性〉や〈主体性〉という、制約条件としての参与者の認知的営みにまで踏み込んだ研究は存在しない。

こうした背景から、研究代表者は言語コミュニケーションの参与者たる話者と聴者の認知活動を基盤とした新しい認知語用論の枠組みを提案するものであった。

2. 研究の目的

本研究は、従来中心的位置を占めていた言語学研究の多くが、文法や意味など、多少なりとも静的で固定された言語現象の形式化に努めるあまり、非優先的な研究対象として考察の外に追いやってきた、〈いま・ここ〉で生起する発話や談話などの動的な言語現象を再考する試みである。その際、ラネカー (Langacker 1987, 1990, 1991) や レイコフ (Lakoff 1987, Lakoff & Johnson 1999) らが提唱する「認知言語学 (Cognitive Linguistics)」の理論的立場と知見に基づき、言語表現と言語使用者、さらにはコンテキストとの間で動的に立ち現れる〈規範〉と〈逸脱〉の相互作用という観点から言語コミュニケーションの認知過程を分析する。「認知語用論 (Cognitive Pragmatics)」という新しい研究プログラムを提唱し、その認知科学的な理論基盤の構築を行うことを主眼とする。

本研究では、以下の3つの側面に焦点を当てた取り組みを行うことを目的とする：

(1) 研究分野としての「認知語用論」の確立と発信

これまで意味論的な分析がほとんどであったレトリック現象に着目し、具体的な言語事例の分析を通じて認知語用論という新しい研究プログラムを確立し、それに沿って、言語現象の新しい記述・分析の可能性を探ることで、その言語学的な有用性と隣接諸分野への接合可能性を明らかにする。具体的には、事態認知過程や発話理解過程の認知的ダイ

ナミズムこそが慣習化された文法的・意味論的な現象の成立基盤となっていることを明らかにすることにより、従来の統語論・意味論の見直しを迫り、同時に参与者の認知状態や潜在するコンテキストの定性化によって、自然言語処理や人工知能分野などの隣接諸科学への応用可能性を示唆する。

(2) 〈主観性〉と〈主体性〉を中心とした言語使用者の認知モデルの構築

記号列としての言語メッセージを、言語使用者やコンテキストから切り離されたものと見るのではなく、言語使用者の〈主観性: subjectivity〉や〈主体性: conativity〉とコンテキストの相互作用の所産として見ることで、発話や談話の中に埋め込まれた言語使用者の認知的活動を明らかにし、事態認知過程や発話理解過程の認知モデルを構築する。特に、これまで言語形式に基づいて区別されてきた隠喩 (メタファー) と直喩も、言語表現に内在化した「意味論的主観性」と、〈いま・ここ〉の言語使用者が付与する「語用論的主観性」の二つの側面から新たな規定を与える。

(3) 〈規範〉と〈逸脱〉のダイナミクスの再帰的循環としての言語コミュニケーション

発話の産出と理解という言語主体の高次の認知活動において、従来想定されてきたような構成主義的なアプローチを批判し、発話が埋め込まれた「発話事態 (speech event)」というゲシュタルトに対する規範的な認知プロセスを明らかにし、言語使用者がどのようにそうした規範的事態からの逸脱を認知していくかという認知メカニズムと、そうした逸脱を新たな規範として取り込む再帰的な認知ダイナミクスを解明する。

3. 研究の方法

研究の方法として、まず WWW コーパス上でアイロニーやメタファーなど、いわゆるレトリックを用いた発話 (文も含む) であると考えられる文例を採集した。そして、そうした文例のミニマルペアを作例し、解釈主体の理解過程の差異を適切に記述することに努めた。また、同一発話がコンテキストによって解釈が異なるというコンテキスト効果を考慮し、コンテキストがどの程度話者と聴者との間で共有されるかを分析した。また、実際の会話コーパスが必要な場面では、精神障がい者や高次脳機能障害者との会話を収録し、トランスクリプションを行った上で分析を進めた。

こうした分析データを収集する一方で、認知語用論の鍵となる、コミュニケーションにおける言語使用者の認知モデルを構築するために、関連する先行研究を調査し、それらの意義と限界を見極めながら認知モデルを

求めた。特に、本研究課題で提案される認知モデルの構成要素とその間の諸関係については幾度も修正を重ね、上記の収集データの分析と最も整合性の高いモデルへとブラッシュアップしていくことに多大な努力を要した。

以上述べたような研究内部での実践に加えて、交流のある言語学者、心理学者、認知科学者、人類学者らと議論を重ねて、途中経過を随時関連する研究会で報告することで、研究全体の質の向上を図った。特に、研究代表者が本研究課題遂行期間を通じて運営委員長を務めた電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーショングループ第3種研究会ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション研究会での有意義なディスカッションなくしては、本研究課題の成果は存在しなかったことを改めて記しておきたい。

4. 研究成果

(1) 発話事態モデルの構築

言語コミュニケーションにおいて言語が理解される場面を発話事態として捉えるために、まず Bühler のオルガノン・モデルで示された発話事態の構成要素としての〈話者〉・〈聴者〉・〈発話〉・〈対象／事態〉という4つの参与項を措定した。しかしながら、オルガノン・モデルでは言語の機能的側面に焦点が当たっていたため、〈話者〉・〈聴者〉・〈対象／事態〉の3つの項が〈発話〉を媒介として取り結ぶ関係についての記述は不十分であった。

そもそも言語コミュニケーション場面において話者が行うことは何であろうかと考えた場合、一般に考えられているのは話者がある事態を認知し、それを言語化し、聴者に対して表出するという一連のプロセスである。話者が行っているこうした一連の発話産出プロセスは、その性質上、時系列的なものとしてのみ捉えられがちであるが、こうした発話という話者の営為を通して聴者に与えられるのは、〈話者〉・〈聴者〉・〈対象／事態〉という三者間の相互関係全体である。つまり、聴者にとって事態がある種の「情報」として示されること、話者が事態を「認知」していること、そして話者が聴者に何らかの「行為」を行うこと、の全ての実現ないし可能性が発話事態に含まれているのである。発話が伝えるこれらの〈話者〉・〈聴者〉・〈対象／事態〉の三者間の相互関係を「言語媒介的關係」と呼ぶこととすれば、オルガノン・モデルにおいて示されていたのは言語とその三者を結ぶ「言語機能的關係」であったと言える。

従って、発話事態モデルを、第一に発話事態が内包する「言語機能的關係」と「言語媒介的關係」の両者を適切に捉えたモデルとして構築し、これによってゲシュタルトとして

の発話事態からどのように解釈主体が参与項、およびそれらの諸関係を前景化するかを考察することで、発話理解過程全体の一貫した説明を可能とした(図1)。

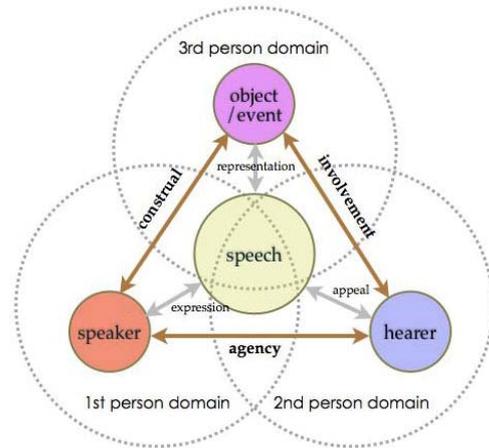


図1：発話事態モデル

(2) 意味論的主観性と語用論的主観性

メタファーと直喩において、従来は明示的な直喩標識の有無に基づいた言語形式的な差異が重視されてきたが、発話理解の観点からは話者と聴者の間で事態認知のグラウンディングが成立しているか否かが重要となる。ある比喩表現が用いられる際、話者の事態認知としての概念間の類似性の設定が聴者の事態認知から逸脱しているとき、直喩表現が用いられやすく、逆に聴者の事態認知と一致しているときにはメタファー表現が用いられやすい。従って、一般的に直喩は語用論的主観性が高く、メタファーは語用論的主観性が低い。しかし、語用論的主観性が高い新奇なメタファーも存在し、それは概念間の類似性の設定においてではなく、基底的なメタファーの拡張の仕方において聴者の事態認知からの逸脱が見られるものである。その意味で、聴者による発話理解過程において直喩とメタファーは異なった道筋を取るものであり、両者を単純に表層的な違いに還元して語ることはできない。

(3) メトニミーリンクとシネクドキリンク

従来は単純にレトリックと考えられてきたメトニミーとシネクドキを、話者の事態認知と事態との関係に置き換えることで、両者の間にある〈メトニミーリンク〉と〈シネクドキリンク〉の発見が聴者にとっての発話事態認知を支えることを明らかにした。

これに基づくと、いわゆるメトニミー表現は指示表現と指示対象の一つの特殊な関係が前景化したものであると考えることができる。通常の指示表現と指示対象の関係においてはほぼ背景化されていた話者の事態認

知が、聴者にとって顕在化した表現のうちで、両者の関係が〈部分—全体〉としてメトニミーリンクで繋がっている場合の指示表現こそが、いわゆるメトニミー表現として理解されることになる。

また、カテゴリー化として表される話者の事態認知を、聴者との間で既に共有している場合とそうでない場合において、発話によってもたらされる情報性のレベルが異なる例が存在する。もし、聴者にとってこのカテゴリー化自体が新規なものであった場合は、命題的な情報と、話者による新奇なカテゴリー化という二つの情報が伝達される。一方、話者と聴者にとって既にそのカテゴリー化が共有されている場合は、指示対象と指示表現の間のシネクドキリンクは背景化し、字義通りの意味が伝達される。

これにより、メトニミーやシネクドキとしてのレトリックらしさ、つまり修辞性は聴者に期待される事態認知との比較に基づき決定される。しかし、そうした修辞表現に留まらず、一般的な推論プロセスにおいても話者の事態認知を前景化する要因としてメトニミーリンクやシネクドキリンクが機能していることが明らかとなった。

(4) 高次脳機能障害者におけるメタ認知活動

高次脳機能障害者は (i) 話者として自己の事態認知を明示化するヘッジ表現を普通に用いており、(ii) 受け手として相手の発話に対する評価を行ったり聞き返しを行っている、という点では健常者と変わらないが、(iii) 相手の発話を言い換えたり表現枠を変えるような高度な受け手行動は示さない、ということを示唆している。このことは、自己の認知や他者の認知の明示的表出そのものが、即ちメタ認知過程を内在するとは言えないことを示唆している。一方、他者の認知した事態についての自己の認知に基づく言い換えなどは、メタ認知能力が関わっている可能性が高いと言える。

また、こうした実際の発話データからの観察から浮かび上がるのは、事態認知を明示化する表現は必ずしも「いま・ここ」の話者のメタ認知を反映した語用論的主観性を持つものではなく、既に慣習化されたメタ認知としての意味論的主観性を持っているに過ぎないという可能性である。

(5) まとめ：認知語用論の射程

発話をトリガーとして生じた発話事態に内在する潜在的な関係性のいずれか（一つとは限らない）を発見することこそが聴者の発話理解であると考えれば、概念化者としての話者が事態を構成する参与者とその関係にあるパースペクティブで切り取って言語化するように、聴者もまた、発話事態を構成

する参与者とそれらの関係を自らの認知に基づいて選択的にプロファイルする認知主体なのであると考えられる。話者と聴者のコミュニケーションにおいて生じているのはこうした話者の事態認知と聴者の発話事態認知の相互作用であり、逆から見れば、コミュニケーションとは話者の認知と聴者の認知のせめぎ合いの中に生じる動的な事態である。その中で話者から聴者への発話メッセージの意味内容の伝達はたまたま生じた副次的な結果に過ぎない。

認知とコミュニケーションを統合的に扱うことの可能な認知語用論に求められるのは、文から発話へとその分析対象をシフトさせた語用論を超えて、他者とコミュニケーションする人間同士の認知的相互作用の解明である。それは同時に、言語のみならず非言語モダリティによってマルチモーダルに展開される人間のコミュニケーション研究においても、重要な示唆を与えることが期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 岡本雅史, 語りにおいて生起し、その理解を支える潜在的人称構造について、査読無, 高木拓明・宇野良子(編)『統計数理研究所共同研究レポート 217 動的システムの情報(7) 自然言語のダイナミズム』, 北海道大学数学講究録 134, 2008, pp.101-110.
- ② 岡本雅史, 比喩表現における意味論的主観性と語用論的主観性, 日本語用論学会第 9 回大会発表論文集, 査読無, 第 2 号, 2007, pp.9-16.

[学会発表] (計 3 件)

- ① 岡本雅史, 高次脳機能障害者の会話場面における話し手/聞き手のメタ認知, 日本認知科学会第 26 回大会, ワークショップ「コミュニケーションの中のメタ認知—高次脳機能障害や精神障害を抱える人々とのコミュニケーションギャップを手掛かりとして—」, 2009 年 9 月 12 日, 慶応大学湘南藤沢キャンパス.
- ② Masashi Okamoto, Triple aspects of subjectivity in understanding figurative utterances: cognitive pragmatics view, *Language, Communication and Cognition: International Conference*, 2008 年 8 月 7 日, ブライトン大学, ブライトン, イギリス.
- ③ Masashi Okamoto, Pragmatic Subjectivity in Metaphors and Similes, *10th*

International Cognitive Linguistics Conference (ICLC10), 2007年7月18日,
AGH 科学技術大学, クラクフ, ポーランド.

〔図書〕(計2件)

- ① 崎田智子, 岡本雅史, 研究社出版, 『言語運用のダイナミズム—認知語用論のアプローチ』, 山梨正明 (編) 講座: 認知言語学のフロンティア第4巻, 2010, 254.
- ② 岡本雅史, オーム社, 実践: 漫才対話のマルチモーダル分析, 坊農真弓・高梨克也 (編) 『知の科学—多人数インタラクションの分析手法』, 5.3 節, 2009, pp.187-202.

〔その他〕

・講演 (計6件)

- ① 岡本雅史, 相互行為を見せるということ—〈オープンコミュニケーション〉の認知的デザインに向けて—, 第4回ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション研究会 (VNV) 年次大会, 2010年3月6日, 国立情報学研究所.
- ② 岡本雅史, 会話構造理解のための分析単位—実践: 漫才対話のマルチモーダル分析, 第57回人工知能セミナー「多人数インタラクションの分析手法」, 2008年7月5日, 東京工業大学.
- ③ 岡本雅史, リアリティサイエンスの視点—MTC コミュニケーションズにおける議論から見えてきたもの, 第11回 MTC 公開講座, 2008年3月11日, 東京工科大学.
- ④ 岡本雅史, 語りにおいて生起し, その理解を支える潜在的人称構造について, 動的システムの情報論7: 自然言語のダイナミズム, 2007年12月1日, 統計数理研究所.
- ⑤ 岡本雅史, シネクドキリンクとメトニミーリンク: 字義性と含意の認知語用論的再考, 京都言語学コロキウム第4回年次大会 (KLCAM-4), 2007年8月25日, 京都大学芝蘭会館.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡本 雅史 (OKAMOTO MASASHI)
東京工科大学・片柳研究所・客員准教授
研究者番号: 30424310

